

1. 年頭の挨拶 (会長 今井和男)

新年あけましておめでとうございます。

会員の皆様には、ご家族おそろいで、輝かしい新春をお迎えしたことと、お喜びを申し上げます。昨年は皆様方のご協力、ご支援により、諸活動は立派に実施できました。

誠にありがとうございました。

さて、昨年の活動を振り返ってみますと

- 維持管理を中心に諸設備の補修（外来種の駆除と繁茂種の淘汰・水路補修・不安全設備の解体等）
- 学童を含めた、田植えから稲刈り、収穫祭の実施（無農薬・有機肥料のみでの栽培体験）
- 親子自然観察隊の勉強（親子隊員と会員による環境自然学習会）
- 他協力団体との連携（フジときらら子どもエコクラブ・ネイチャーゲームの会・市環境政策課関係の他市団体）

等々昨年は、猛暑、大雨と気候の変動が大きく特に駐車場の草刈り、稲穂のイナゴ捕獲は大変のご苦労があったと思います。

また収穫祭は、久保田市長の特別参加を頂き、祭りも盛り上げが出来ました事は大変好評でありました。終わりに「里山ビオトープ二俣瀬」の創造に努めてまいりますので皆様方の更なる、ご協力をお願いするとともに、皆様方のご健勝を祈念いたしまして、年頭の挨拶いたします。

2. 活動報告 (事務局 記)

—12月28日(土)今年最後の活動(非定常)として、懇親会を行いました。

出席者17名+子供さん2名他1名の参加を得まして、カブトムシ幼虫ボックスの移動・水車水路の溝あげを行ったあと、年末懇親会を開きました。

—1月17日(金)東京都市大学の環境学部 古川務 准教授が宇部市環境政策課の方とビオトープへ視察に来られました。原田事務局長と原谷会員で対応しました。

—1月18日(土)25年度残活動詳細確認と、26年度の活動指針を図る初集会が行われました。

基本的には25年度と同様な方法で、親子自然観察隊・稲作体験・維持管理活動を行う事になりました。総会は4月5日(第一土曜日)です。ほか、提案のあった名誉会員については、200回記念号発行の折に委員会にて決定する。宇部市生物多様性応援団市民会議は菅会員が対応することになりました。

そのほか詳細は議事録に掲載しています。参加者は23名で活発な提案もあり議事が進行しました。

3. 今後の予定（事務局 記）

◎見学者

特にありません

◎行 事

—2月2日（日）維持活動（エコアップ、修復作業）

—2月15日（土）維持活動（修復作業）

4. 来訪者の声

今月はありません

5. 会員の声【 会報150号記念投稿 】

（会長 今井 和男 記）

今回の会報150号発刊は記念すべき会報で、お祝い申し上げます。

会報第一号は2001年（ビオトープの竣工式に開始）、第100号は2009年（10年の歩み冊子作成）、第150号は2014年（1月号と併用）

会報1号から150号までの間毎月一回の発行が続けられました事は、編集委員各位をはじめ会報編集責任者原谷一誠会員の積極的な取り組みに深く敬意を表します。

この会報がいつまでも発行できますよう、各会員の投稿をお願いする次第であります。

会報もさることながら、「里山ビオトープ二俣瀬」がますます充実した活動の場でありますよう会員の皆様に、重ねてご協力をお願い致します。

会報雑感（副会長 原田 賢治 記）

皆さん、新しい年を迎えられ、お喜び申し上げます。

今年最初の会報は、平成13年5月に第1号が発行されて以来、12年9ヶ月で記念すべき150号となります。

その間編集に係わってこられた、原谷さんを始め各委員の皆さんにお礼申し上げます。ご苦勞さまでした。

今回、私は1号から149号までを一通り目を通してみました。あのとき、そのときの一コマ、一コマが走馬灯のように、思い起こされ懐かしさを覚えました。更に地元先輩が周辺の史跡・旧跡を語り調で詳解されているのを読み、その人柄と懐かしさを思い起こしました。

専門的な知識のもと、ビオトープ内外の水生動植物の生態等について、詳しく解説されている記事は1号から続いています。貴重な参考資料として活用されることを願います。続けることは大変なことです、続けることは大事なことです。これからもよろしく願いいたします。皆さんのご健勝をお祈りします。

（副会長 田村 勝芳 記）

会報150号の発行おめでとうございます。編集責任者の原谷一誠さん他関係者の努力でこの会報が継続して発行されていることに感謝します。会報の第1号が2001年5月であり今年には13年目になります。新たな気持ちで会員がビオトープの活動に取組めることを期待したいと思います。最近の会報も会員の投稿が少なくなっていますが今年には全員参加を目標

に従来実行していた会員のリレー方式で輪を拡大したいものです。

炬燵今昔 (内藤 武頭 記)

炬燵(こたつ) 人に親しまれ、冬にはなくてはならない暖文化の一つである。炉を切り上に檜(やぐら)を乗せ蒲団(ふとん)で暖を取る切炬燵(堀炬燵)と檜の中に炭や練炭などの入った中子を入れた置炬燵、そして床に炉を切り火を入れ、檜を置かず床と同じ高さの格子を乗せ、これに蒲団をかけて四方から脚を入れて暖をとった敷炬燵。

江戸時代粋な一句があった

“思う人の 側へ割り込む 炬燵かな “ 誰の句だろうかと思った。そしてびっくり飄々とした俳人「小林一茶」の句であった。世俗的な雰囲気を好むのは人間みな同じ。

昭和時代小学校の唱歌に登場 「雪やコンコン あられやコンコン 降っても降ってもまだ降りやまぬ 犬は喜び 庭かけまわり 猫は炬燵で丸くなる」

平成時代箱根駅伝 昭和30年代後半より電気コタツが普及、以来炬燵の主流となった。初春はコタツで箱根駅伝を楽しむようになった。箱根駅伝の最長区間は2区、選手たちを苦しめる長い坂“権太坂“がある。その名前の由来、昔ある旅人が余り坂が長いので、道傍にいたおじいちゃんに坂の名前を尋ねました。おじいちゃんは“権太”ですと答えた。

後日談・・・このおじいちゃんは耳の遠いお方で、自分の名前を尋ねられた思い“権太”ですと答えたようです。

新年は炬燵文化の中でどうぞごゆっくりお過ごしください。

会報ビオトープ150号の発行となりました。永遠に続くであろうビオトープの文化のまだ一里塚。 締め的一句 “ひたすらに 春待つ音や 水車”

家族ぐるみで「つくる会」に参加して (中本 亜矢子 記)

里山ビオトープ二俣瀬をつくる会が発足14年目を迎えるとのこと。もうそんなに経つのかと思い、以前冊子化された「里山ビオトープ二俣瀬 10年の歩み」を開いてみたら、2000年9月に設立準備会を発足したと記載してありました。その頃、子どもたちは小学生。子どもたちは少年野球に入っておりましたが、会に参加することで自然に触れる機会を少しでもつくることができればと、思い切って準備会に参加したことを思い出しました。

それから14年の間、うちの家族は様々な形でこの会に参加させていただきました。二人の子どもたちは観察隊の隊員になり、四季折々の里山の自然を体験させていただきました。子供の頃から虫好きな夫も、観察隊の「虫の観察」には講師で参加をしてくれました。子供たちがお世話になったこともあり、私は観察隊のスタッフとして連絡係をさせていただくようになりました。しし鍋や餅づくりの際には母にも参加してもらい、少ない女性スタッフの一員として活躍してもらっています。

14年間続けてきた「つくる会」。今後も環境学習の拠点として、発展的に継続していくことを願っていますが、問題なのは会員の高齢化です。設立当初からの会員は、みな14年歳をとり、毎月の維持管理の作業や、田植えや稲刈りなどの行事の準備も大変になってまいりました。この会の活動に賛同し支えてくださる新規の会員さんを増やしていかないと、今までどおりの活動が難しくなると思います。一番身近なところでは、観察隊のご家族が年間を通して「つくる会」の活動に触れるので、「観察隊」だけにとどまらず、維持管理も含めて家族みんなでこの会に参加していただけるといいのではないかと思います。

我が家の場合も家族ぐるみで「つくる会」に参加させていただいて、本当に良かったと思っ

ています。観察隊やボランティアを通して共通の体験をすることは、親子の絆を深め、環境問題についても話ができるきっかけになりました。親子で何かに取り組む機会というのは、意識してつくりださないとなかなか出来ないものだと思います。今後、観察隊のご家族には、その点も今まで以上にその点もアピールしながら活動していきたいと思っています。

（ 関根 雅彦 記）

日々の忙しさの中で、年間通してビオトープ活動に関わっていくのが難しい方が多いと思いますが、短時間自然の中で汗を流したい人は大勢いらっしゃると思います。自分もどちらかと言えばその一人です。

そのような方が参加できる企画を活動に織り込み、その中から少しでもコアメンバ(アイデアを出すメンバ)に入ってくれる人が出てくれば、持続性のある活動にできると思います。多様な応援団ができた今はその好機です。コアメンバとして、まずは気軽にアイデアを出し合う機会を持ちましょう！

（ 阿部 真希子 記）

昨年から里山ビオトープでの活動に参加させていただき、毎回たくさんの知識を皆様から教えていただきました。ビオトープの活動を通して、昨年よりも一つでも多くのことを学んでいきたいと思っています。よろしくお願い致します。

「会報」第150号 発刊に思う （ 管 哲郎 記）

会員の皆さま、あけましておめでとうございます。

里山ビオトープ二俣瀬の会報も1月号で「第150号」の発刊となりました、併せておめでとうございます。月1回の発行で12年半となる計算です。

私の入会は2002年2月でしたので、2000年9月の発足よりおよそ1年半遅れで入会したことになります。2002年3月13日の総会初出席と、さらに同年3月24日には、施工中のビオトープの整備工事が完成いたしましたので、幸運にも竣工式、祝賀会に参加させていただくことができました。ですから自分としましては出来上がったばかりのフィールドの最初よりの記憶がありますので、発足当初よりずっと今日までビオトープを見続けたような気持ちでいるところです。

里山ビオトープ二俣瀬の素晴らしいところ(値打ち)は、やはり”継続された「会報」だと思います。どのような小さな団体でも、行動した記録が残されてこそ”値打ち”が生まれるものと思います。いろんな方のお話をお伺いしても、やはり記録の有無によって、その団体の価値が決まるとのお話でした。

4月より新年度の行事は始まりますが、会報発行にお休みはありません。この「第150号」が1月よりさっそく発刊されました。会員の皆様の協力なくしては充実した内容にはなりません、小さな出来事で十分です、小さな声の集まりがやがては大きな成果を生むことにつながります、維持活動に出られなければせめて、お声をお聞かせください。

昨年の「秋の昆虫」観察会では、みなさん方に昆虫の名前を調べていただきました。この作業により、図鑑の種類、扱い方、調べ方、昆虫の種類などがより身近に感じられたことと思います。それによって、多くの隊員たちや親たちが、いろんな感想を抱き、疑問や意見を多く持つようになったことと思います。

こうした作業の後の感想は、とても貴重な記録となります、これらの作業を通じ、皆さま

に多くのご意見や感想を寄せていただこうと思っています。何卒ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

尚、会報をまとめておられる事務局、編集担当者、会員の皆様には、敬意を表します。これから素晴らしいお仕事を続けられることを願っております。

「環境保全について」 (落合 直巳 記)

2年前から二俣瀬で農業に挑戦中です。40年間、耕作を放棄した田んぼは藪どころか大きな木が生えた雑木林になっていましたが、せめて果樹園としてもう一度復活させたいと思い開墾しています。草刈り機やチェーンソーを使って切り開いていると、音でわかるのでしょうか、近くの木に小鳥がやってきて、こちらの作業を監視しています。倒した木の実や刈った草付近の虫を食べています。メジロやキビタキのようです。作業をやめて休憩していると、ホウジロ、ウグイスやホトトギスの声を聞くことができます。その他色々な種類の小鳥が現れます。

約50aを開墾した頃から空に猛禽類が現れるようになりなした。たぶんトビと思われます。時々、カラスに追われていますが、上空をゆうゆうと旋回しながら、畑を荒らすネズミやモグラを退治してくれる有難い存在です。

現在、植えている果樹はカキ、クリ、桃、梅ですが、実がなるようになったらどんな鳥が現れるのか楽しみにしています。果樹園の害虫を食べてくれる鳥と果実を食べる鳥が現れることでしょうか。鳥獣被害を抑えながら生き物と共存する方法を考えたいと思います。

自然をそのまま保全する環境保全もありますが、人間が自然を活用しながら環境を保全するやり方もあると思います。人間が自然を活用するために、自然環境に手を加え畑や田んぼに変えると、その環境にあった生き物が集まり、新たな生態系が生まれ、維持されるようになります。このような環境は人間の自然活用の必要性がある限り、長く維持することができます。日本の美しい里山の風景は、人間が自然を活用し、他の生き物たちと共存した環境を保全した結果です。今後も、他の生き物との共存を目指す自然農法に挑戦していきたいと思っています。

150回記念原稿 (松本 フデ子 記)

もう150回、あれからかけ足で時間が過ぎてしまったのか、先日100回記念から。ビオトープでは、絶滅危惧種と言われている植物たちでも住ごごちが良ければ、これでもかと根を伸ばし広がっていく。取ってもとつても絶滅どころか、作業が追いつかず、エコアップも中々アップできない状況になっているように思われる。今の状況をもっと前進するために打開策を皆で考える時が来ているのではないかな？みんな一年一年歳を重ねているけれど。

「雪の日のこと」 (寺本 明広 記)

1月10日、山口県全域に強い寒気が流れ込み、天気予報ではどこも雪だるまのマーク。用事で山口市内に来ていたのですが日付が変わった頃から雪が強く降り出しました。用事を済ませ、さて帰ろう、と車を見れば車も雪化粧。雪を積もらせた車で家のある阿知須へ向かいながら、阿知須も積雪しているかも・・・と胸が躍ります。しかし、小郡を境に雪は弱まり、瀬戸内海に面している阿知須に入ると雪が降る気配すらありません。それでも、朝までには降り出すでしょう、と期待しましたが、翌朝も快晴の天気。放射冷却のため冷え込んだものの、阿知須の雪景色は叶いませんでした。

どうしても雪景色が見たい。この辺で積もってそうな場所を考えたとき、真っ先に思い浮かんだのが二俣瀬。阿知須から山ひとつ向こうにある二俣瀬なら雪が積もっているのではなかろうか。銀世界のビオトープに舞い降りる野鳥たち。そんな情景が脳裏に浮かぶ。その情景の写真を撮って会報に載せていただきたい。本日仕事は休み。チャンスは今日しかない。さあ二俣瀬に出発！気合十分で車を走らせました。

すぐに落ちになりますが、雪景色のビオトープに野鳥、そんな写真は撮れませんでした。そもそも二俣瀬には雪が降ってなく、あたりを見渡しても雪が積もっているのは自分の車の上だけ。友人から山口市内、秋吉台、小野といった周辺の積雪状況を聞いていたので、どうして二俣瀬には雪が降らないのだろうかと首を傾げる結果となりました。

ただ、当初の目標が達成できなかつただけで、何も収穫がなかったわけではありません。ビオトープの湿地帯の中にきらりと光るもの、ニホンアカガエルの卵塊を見つけました。生き物の知恵なのでしょうが、よくまあ冷たい水の中で産卵なんてできるものだ、と卵塊を見るたびに感心させられます。雪ばかり追いかけていたところに思わぬ出会いになりましたが、春を感じさせるあたたかな気持ちにさせてくれました。

さて、会報も今回で 150 号という節目を迎えました。つくる会は今年で発足 14 年目。それに対して私が関わってきたのはほんの 2 年ほど。入会した時から 100 号を超えていた会報には、毎回継続してきた歴史の重みを感じます。その中に文章を書けるのは大変光栄なこととして、これからもチャンスあらばその歴史に新たなページを刻んでいきたい、そんなことをひそかに思っています。今後ともよろしく願います。

「里山ビオトープ二俣瀬の活動に参加して思うこと」 (大野 靖子 記)

里山ビオトープ二俣瀬を知ったのは、以前、宇部で実施されている子どもエコクラブにスタッフとして参加していた時に、活動場所として訪れた時でした。会員の皆さんが講師として、子ども達にいろいろな事をお話しされましたが、ここに棲む生きものの不思議やヒミツなどをお聞きして、自分自身もとてもワクワクしたのを覚えています。

これをきっかけに活動に参加させて頂くようになりましたが、その間に結婚、山口市から周南市への転居、出産、育児を経験し、途中なかなか参加できずにもいますが、それでも参加できる日は、私にとって、とても大切な時間となっています。

観察隊の日は、親子で参加させて頂いています。二人の子どもはまだ幼児のため、みなさんの活動にすっかりついていくことはできませんが、雰囲気を楽しめるようになり、ビオトープに行くのを楽しみにするようになってきました。

維持管理活動の日は、子どもの守りを主人に頼めることができる時は、いそいそと作業着を持ちだして出かけます。作業中は時折和やかにお話ししたり、また皆さんの会話を聞きながら黙々と作業に集中します。休憩中の東屋では、美味しいコーヒーを頂きながらボーッと田んぼや山や、空に舞うトンボを眺めたりします。でもまわりでは皆さんの和やかなお話が聞こえてきますので、まるっきり一人というわけでもなく、なんともいえないリラックスした時を過ごすことができます。

以前ラジオで、雑多な日常から離れて自然に身をおくと、いったん心がリセットされて良いというお話がありました。私にとって里山ビオトープ二俣瀬はまさにそういった機会を与えてくださる、大切な場です。なかなか毎回参加することができないませんが、今後ともよろしくお願い致します。

「私と二俣瀬ビオトープとのつながり」 (三宅 弘 記)

現在の二俣瀬の地、車地のビオトープなるいわば宇部市の桃源郷なる地が出現して早や10+2=12年か13年頃になるかと思うのである。私のふるさと山陰は島根県石見の邑智の郷(おおちのさと)は中国五県随一の江の川(ごうのかわ)なる大河の近辺で前述のビオトープに相似たところだ。昭和30年代に縁有って宇部興産(株)宇部鉄工所に入所、軍隊帰りのコワイおっさんにしごかれ技術を習得、反面山岳部に入り山口県の山々を初め、山登りと自然に接し60余年の歳月が経過した。ひるがえてかえり観ると宇部市の里山ビオトープはなんととっても暖かい地元の支援のもと近辺の有志の人々が集(つどう)会であり、校外での親子観察隊の研究班は四季を通じて自然と融合、観察と教え合う多くのことが楽しいのである(野外活動)。近年はこのビオトープを起点とし広く地理、歴史を探索、江戸時代からの山陽道なる通過地点である二俣瀬、木田、車地をてくてく歩き古蹟を訪ねる。私は里山ビオトープ二俣瀬をつくる会に所属し、これからも大いに勉強し、多くの人に接し、そしてかけがいのない自然を大事にしたいと思うのです。

「祝 150号発刊」 (工藤 慎一 記)

長男の純平を皮切りに、次男の航平、長女の理子が観察隊にお世話になりました。我が家が一番恩恵を受けているのではないのでしょうか。

親も含めて、毎回楽しく参加させて頂き、感謝しております。

また、観察隊運営の陰には、会員の皆さんの努力があることを知り、何かお返しをしたいとの思いから、平成22年より維持活動にも参加させていただいています。

色男でもないのに金と力はありませんが、週末は時間が取れますので、お役に立ちたいと思っています。

(宇部市 市民環境部 環境政策課 記)

記念すべき150回目の会報発行、おめでとうございます。

平成12年度に休耕田を活用したビオトープとして「里山ビオトープ二俣瀬」が整備され、今日までビオトープが継続し環境教育の場として活用されたのは、里山ビオトープ二俣瀬をつくる会の皆様のご尽力はもとより、地域一体となった支援によるものと思います。

今後とも宇部市が誇るビオトープとして、市も広く周知・活用していきたいと考えていますので、引き続きご支援、ご協力賜りますようお願いいたします。

(編集責任者 原谷 一誠 記)

150回目となる記念号を発行するに對し、会員の声に投稿依頼をしましたが、さてどの程度書いてもらえるのだろうかと不安でしたが、私の予想以上に書いて頂きました。(感謝!)やはり日頃感じておられることを、一度文章にしてもらえると、その思いは皆様に伝わります。維持活動の休憩のときに、雑談していますが、これは良いねと思われることが多々あります。その都度、メモでも取れば良いのですが、作業が終わる頃には、すっかり忘れていきます。言ったことは「ごめん」で訂正できますが、文章になると、訂正も難しくそのままとなりがちです。でも、それぞれの思いですから、今後も「会員の声」にどしどし投稿して下さい。誹謗中傷は、私が判断して記載しません。掲載されたことに、違った意見のある方は、反論を投稿して下さい。重要な問題であれば、臨時集会を事務局に開催してもらいます。あの創立の時のように、またがんがんと議論がしたいですね、たまには!

次の200号は、4年ちょっと先ですが、私を含めてどの位の人が元気に活動しているのでしょうか。若い人がどしどし入ってこられ、次の世代にお願いできて、今後も益々ビオトープが継続され発展することを願ってやみません。

6. ビオトープ関連：「山口県のトンボたち」 (管哲郎記)

「山口県のトンボ」シリーズもはや1年がたち、2年目に入ります。トンボの紹介だけでは面白くないので、面白いエピソードをからめてと思っていたのですが、つついさりと紹介するだけに終わってしまいました。今年よりはできるだけちょっとした小話などを入れて、紹介してみようかと思っています。トンボの紹介だけでも2015年12月まではたっぷりとかかりますので、ご愛読よろしく願いいたします。

(13) キイロヤマトンボ *Macromia daimoji* Okumura

エゾトンボ科 *Corduliidae* Karsch <コヤマトンボ属> *Macromia* Rambur

全国的にも年々数が少なくなっているようなトンボでして、全国では準絶滅危惧種(NT)、山口県では絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定され、岡山県を除く中国地方全域でも山口県と同じ絶滅危惧Ⅱ類にランクされています。

宇部市の厚東川、山口市のふし野川、光市の島田川などで確認されていますが、数年前から厚東川では成虫の姿を見ていません。筆者にとっては今年の課題としています。

幼虫(ヤゴ)は比較的きれいな大きな川の中流部から上流部や支流の、砂質や砂礫の多い川底を好み、あるいは、おおきなため池などにも棲息しているようです。6月ごろ羽化し、7月ごろに多く見られます。若いトンボは近くの林や森の開けた上空を行き来し、大きな樹木の付近を旋回したりしていますが、成熟したオスは川面をかなりのスピードで飛翔し、産卵にくるメスを待っています。川の中で♂トンボを待っても、飛翔速度が速くて捕えることは難しく、林の間を飛ぶトンボを追ったほうが確実であるかもしれません。

このトンボは不思議な生態をしており、広島県のヤゴが多くいる場所でさえ羽化の姿が見られないとのこと。いったいどこで羽化しているのか、恥ずかしながら筆者も未だに県内でヤゴはおろか羽化殻さえ見たことがないのです。ただ、トンボの仲間より昔、光市の島田川の河川敷で羽化殻を1ヶ見つけたとの報告を受けているのと、宇部市内を流れる真締川の最上流部の細い流れでヤゴをすくったとのお話も聞いています。最近では山口市内を流れる”ふしの川”でヤゴがすくい取られています。

筆者も以前には数年間にわたって厚東川に入りヤゴを探しました。オオヤマトンボやコヤマトンボのヤゴはたくさん見つかるのですが、本種のヤゴだけが見つかりません。広島県で実績のあるトンボ仲間も厚東川に入り、ヤゴのすくい取りを試みてくれたのですが、全く見つからなかったとの報告をいただき、少々がっかりしているところです。

以前は、厚東川のある特定の場所の土手近くで見張っていれば、成虫が必ず数頭は見られましたし、2~3頭は採集可能でした。写真はその時に撮影したのですが、いつでも撮影できると思い、あまり熱心に撮影しておかなかったのが失敗のもと！今になっては残念に思われます。

このようなトンボでもたくさん発生すると、ビオトープの須賀河内川にも姿が見られるようになります。以前会員であった故人の原隆さんが確認されています。今年より筆者はこのトンボを再び追っかけてみようかと思っています。厚東川に相変わらず棲息してしてくれる

ことを祈るのみです。

尚、そっくりさんのトンボでは、オオヤマトンボとコヤマトンボがいます、特にコヤマトンボが本種とよく似ていますので、くれぐれもご注意を！



キイロヤマトンボ (♂)



キイロヤマトンボ (♀)



キイロヤマトンボ (♂)



キイロヤマトンボ (♀)

コヤマトンボ♂ (右) →

オオヤマトンボ♂ (左) →



7. 会よりの連絡事項 (事務局より)

(1)、初集会の議決のうち主だったことを記載します・25年度4月までの活動日が4回しかなく維持管理に若干の無理が生じているため、活動日を3月に2日・15日・他22日(第4土曜日)を臨時活動日とすることになりました。又定常活動日にもエコアップに関して午後も継続して行う事もありますが、可能な方をお願いすることもあります。

(2)、会報150回に寄せて (事務局長 原田 満洲夫 記)

「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」が立ち上がって会報を発刊することになり、いつまで会報が続けられるかと思案したものです。おそらく50回くらいで“尻きりトンボ”になるであろうと予測しました。しかし100回はおろか150回も続いたことに敬意を表します。

しかしながら当初は、ビオトープ周辺の逸話とか、ビオトープ周辺の植栽とか、ビオトープ創設に関わる話など、内容が豊富で会員の皆様も興味があり、あらゆる方面からの情報を含んだ内容で、割と簡単に会報が発刊出来たものの最近編集委員ほか若干名の決まった会員の投稿となって編集委員会も苦慮しています。

この150回記念号において初心に帰り全員参加の会報発刊としたいと思います。今回投稿された機に今後とも振るってご協力を頂き今後200回250回と継続発刊出来ることを祈念いたします。“継続は力なり”

8. 編集後記

忘年会、いつもこの時の楽しみのシシ肉、鍋に焼き肉。又、当日特大のシイタケがたくさん収穫され、とれたてを味わうことが出来た。話をしている中で年齢を聞いて、より若くみえ元気に活動されている事にちょっと驚いたり、自分もそれまで元気に活動出来るとよいけれど。

(松本 フデ子 記)